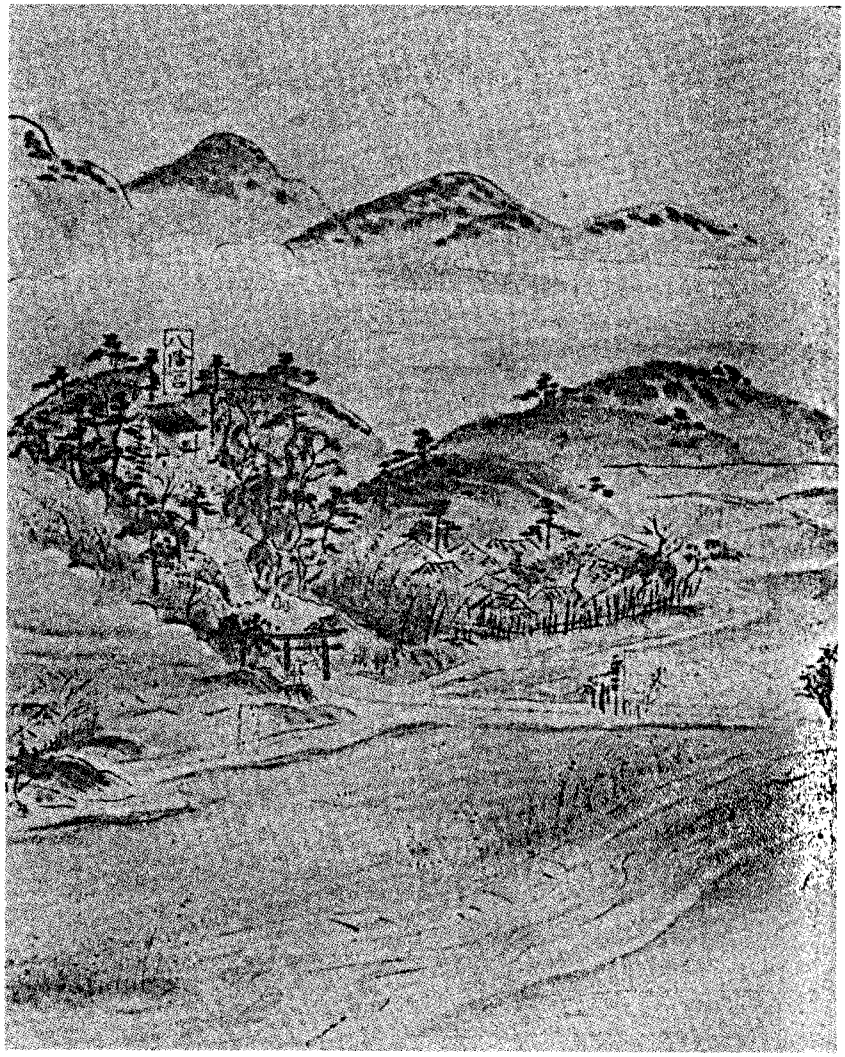
福岡市博多区

下月隈宮ノ後遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第61集

1980

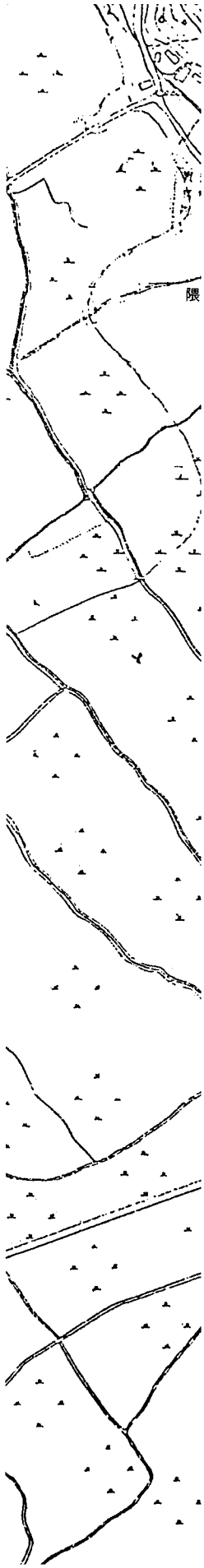
福岡市教育委員会



遺跡遠景（西方より）「月隈八幡宮図」

加藤一純・鷹取周成著『筑前國續風土記附録』（50巻）

川添昭二校訂・福岡古文書を読む会
『筑前國續風土記附録』（上巻）　文献出版　1977年10月より



今から40年前のようす（縮尺 1/5,000）

●印が下月隈宮ノ後遺跡
（等高線の間隔は2メートル）

隈月下
下月隈
宮ノ後遺跡
下月隈
上月隈
筑紫郡
席田村

序　　文

福岡平野の東部丘陵一帯は、国指定史跡金隈遺跡を始めとする弥生時代の共同墓地群の所在する丘陵として知られております。

本書は、昭和54年度に月隈丘陵で実施した埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものです。

本書が市民各位の文化財保護への関心を高める一助となれば幸いです。

調査にあたり、ご協力いただいた地元の方々を始め、関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和55年3月

福岡市教育委員会
教育長　西津茂美

凡　　例

- 本書は、福岡市教育委員会が昭和54年度の国庫補助を受けて、1979年12月22日から発掘調査を実施している福岡市博多区大字下月隈字宮ノ後に位置する弥生時代の甕棺墓及び土坑墓の発掘調査概報（速報）である。
- 遺跡名は、現在の大字名、小字名を組み合わせて『下月隈宮ノ後遺跡』とする。
- 遺跡の発掘調査には、福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄、力武卓治、岡島洋一（事務担当）が当り、本書の執筆・編集は飛高憲雄・力武卓治が行なった。
- 遺跡の発掘調査及び本書の作成には、次の方々のご協力を得ました。氏名を記して感謝の意を表します。（敬称略）

  荒津孝治　岩永真弓　江越初代　河野徹也　関加代子　関政子　実淵栄治
  鶴田サヨ子　中山政子　花畑照子　平島龍吉　安武裕子　山内タツ子
- 調査事務所の設置には、地元真教寺住職月江英海氏、光安禎太郎氏の絶大なるご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。
- なお本書裏見返しに掲載した遺跡分布図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の１地形図を用いて作成し複製したものである。（承認番号）昭55九複、第84号

目　　次

序　文
凡例　　本文目次
第Ⅰ章　　はじめに……（3）
第Ⅱ章　　調査の記録……（5）
　　１．甕棺墓……（7）
　　２．土坑墓……（16）
第Ⅲ章　　まとめ……（16）

表紙は、遺跡遠景（東方より）

第Ⅰ章 はじめに

福岡平野の東を限る三郡山地より派生した大城山（標高410ｍ）の山麓に、南東から北西に延びる古第三紀層によって形成された月隈丘陵がある。

現在、発掘調査中の「下月隈宮ノ後遺跡」は、この月隈丘陵のほぼ中央部で、福岡空港滑走路東南隅より約300ｍ東に当り、県道板付空港線の月隈交差点から粕屋郡志免町へ抜ける道路に面した丘陵上に位置する。古地図を見ると、月隈丘陵には西へ延びる支丘が幾つもあり、支丘と支丘との間の谷には、出口に堤防を築いた用水池が見られる。当遺跡の立地する丘陵も長さ約300ｍ、幅約50ｍで東から延びる一支丘であり、遺跡はその先端よりやや内側にある。その最先端には、江戸時代以来、月隈八幡宮が祀られ、境内と調査地点の間は約40ｍの幅で約６ｍの深さまで土取りがなされ、青空駐車場となっている。調査地点は、現在、標高23ｍであるが、今から40年前には約24ｍはあったようである。今回の当遺跡発掘調査のきっかけは、一昨年、土地所有者による土取り作業中、幾つかの甕棺が出土し、直ちに作業を中止して当文化課に通報されたことによる。月隈丘陵には、弥生時代の甕棺墓が数か所で確認されているが、何れの場合も主に土取り作業中の発見で、ほとんどの場合が調査されずに破壊され、事後に現地を訪れるのが実情であった。その点からも今回の「下月隈宮ノ後遺跡」発掘調査の意義は大である。

ところで、周辺の遺跡であるが、まず当遺跡から南を見ると、約200ｍ離れた、月隈丘陵から延びた一支丘の先端部に、弥生時代中期の甕棺墓地として知られる「上月隈遺跡」[注1]があり、また目を北西に転じれば、約200ｍ先に「下月隈天神森古墳群」のある天神森の岡が見える。一方、はるか南西には初期農耕集落遺跡として著名な「板付遺跡」が、さらに奥には奴国王の墓所といわれる「須玖岡本遺跡」等々が望まれる。

さて、当遺跡から、さほど離れぬ、同じ月隈内で、かつて鏡、銅鉾鎔范及び形態不明の青銅器片４点が共伴出土したとの報告もある[注2]。また、当遺跡近接地から棒状の青銅製品が崖面の甕棺の中と思われるところから出土したと聞く[注3]。なお、金隈遺跡の発掘調査期間中に数基の甕棺墓が確認され、かつ石剣１本を副葬した石蓋土坑墓（？）が調査された月隈遺跡[注4]とは、当遺跡の東側隣接地であろうか。

注１　山崎純男「宝満尾遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第26集　1974年３月

注２　高橋健自『銅鉾銅剣の研究』　聚精堂　1925年11月

注３　福岡市教育委員会文化課　横山邦継氏よりご教示。

注４　折尾学「金隈遺跡第二次調査概報」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第17集　1971年３月

4　地形測量図

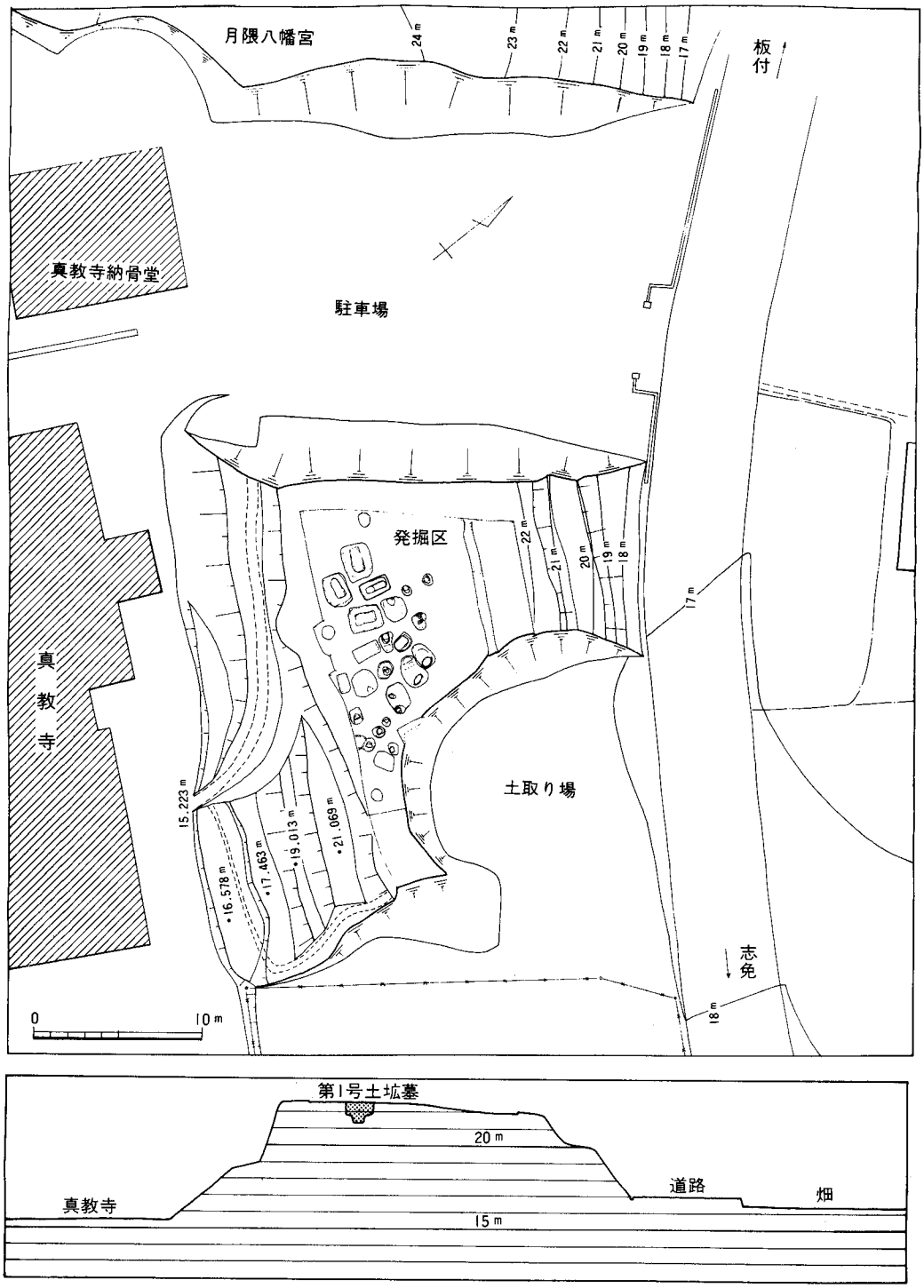


Fig. 1　　地形測量図　(縮尺 1/400)

Fig. 2　遺構全景

第II章 調 査 の 記 録

遺跡はかつて果樹園に利用されており、断面図でもわかるように斜面部は削平されて旧地形とは大きく異なっている。このため発掘区を斜面部は避け上坦部に設定した。先にも記したごとく上坦部の北東部は土取りですでになく、結局15.2×16.2mの範囲の発掘区となった。厚さ30cm程の表土を剝ぐとすぐに花崗岩のバイラン土が現われ、遺構はこの面に掘りこまれている。これまでに土坑墓7基と甕棺墓17基、性格不明の土坑5基を検出したが、現在なお調査を続行しており、土坑墓、甕棺墓ともにあと数基追加される可能性がある。土坑墓のうち第6号をのぞく6基はすべて二段掘である。甕棺墓は5基が成人用であり、12基が小児用である。第3号甕棺墓と第9号甕棺墓中には人骨が残存していることが確認されている。これまでの調査では副葬品はなく、また祭祀遺構や溝などの外部施設遺構は発見されていない。

6 甕棺墓・土壙墓配置図

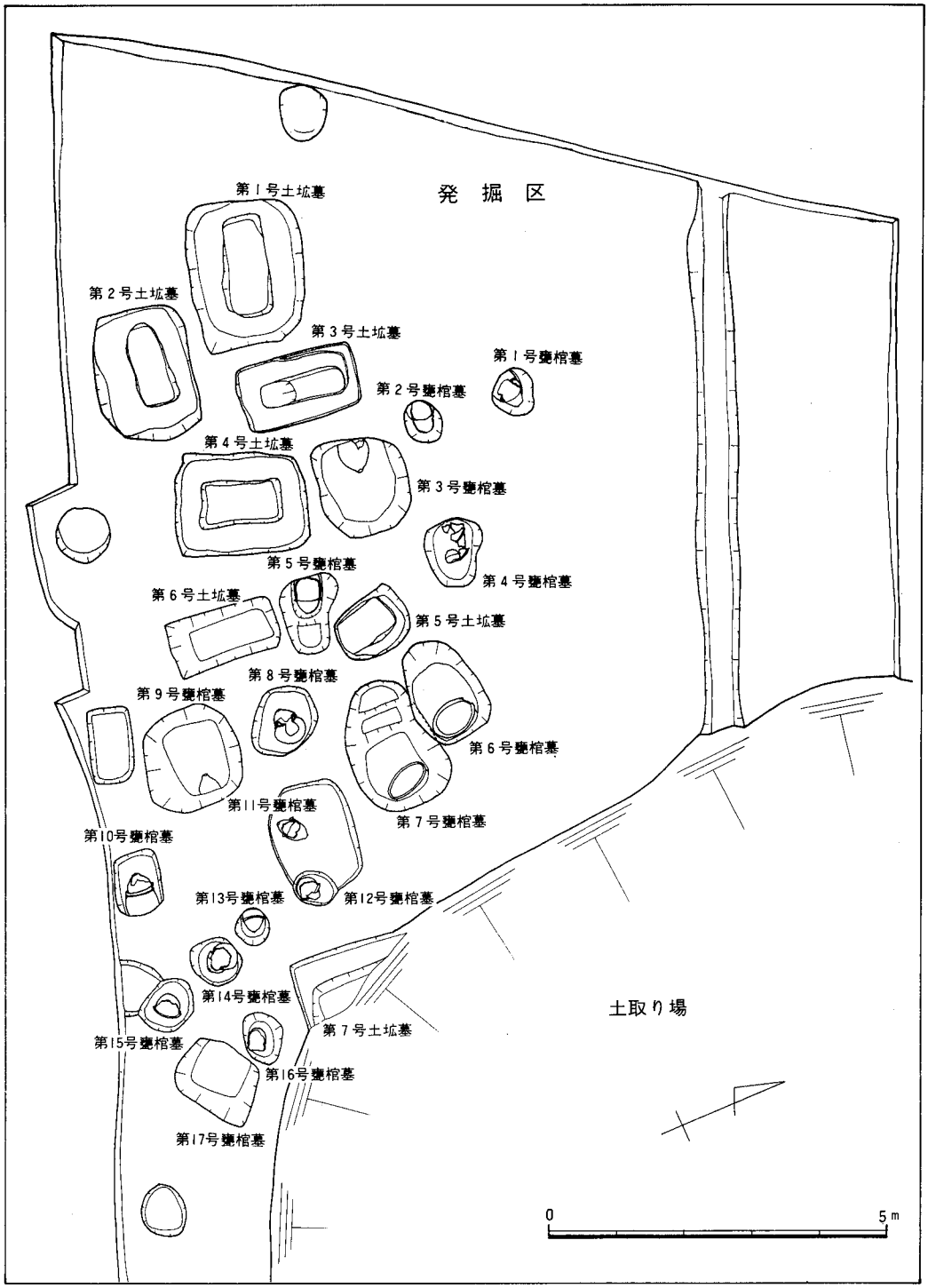
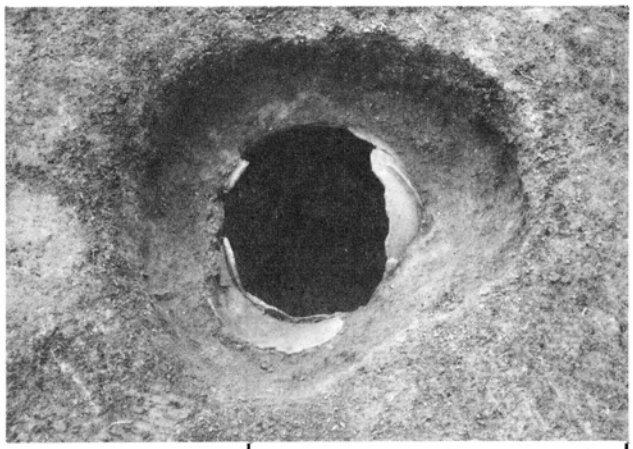


Fig. 3　甕棺墓・土壙墓配置図（縮尺 1/100）

1．甕　棺　墓



第１号甕棺墓

第２号甕棺墓の北側約1.3ｍの所にあり、本遺跡ではもっとも北側に位置している。墓坑上面は直径約65cmの不整円形を呈し、さらに西南方向に斜めに掘られている。坑底はほぼ平坦をなし、上面からの深さは約60cmを計る。上部は削平されており、上棺はわずかにその一部を残すのみである。上棺は小型の甕、下棺は壺を用いた複棺である。下棺の壺は頸部より上を打ち欠いており、上棺の甕口縁部と合わせている。この部分には灰白色粘土が見られ目張りをしたものと思われる。

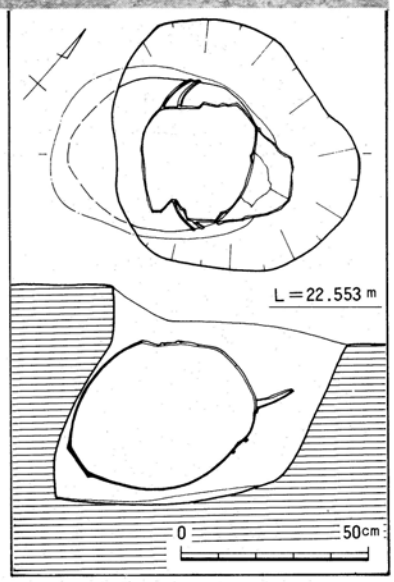
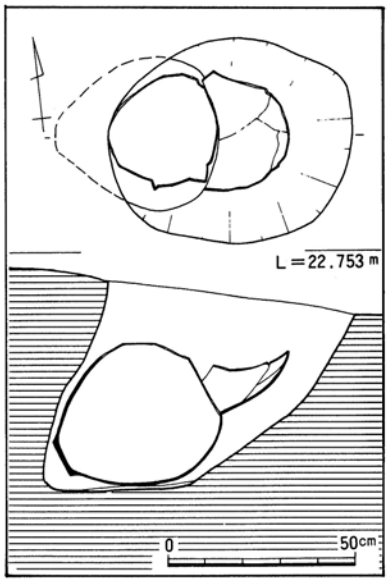


Fig. 4　第１号甕棺墓

Fig. 5　第３号甕棺墓

第３号甕棺墓

第２号甕棺墓と第４号土坑墓の間にある。墓坑は上面で約1.3ｍの隅丸方形で、80cm程の深さから西に向かって斜坑が掘られ下棺を埋置している。上・下棺とも甕で下棺は口縁下に１条、胴部に２条の凸帯を持つ大型甕が用いられている。人骨が残っている。



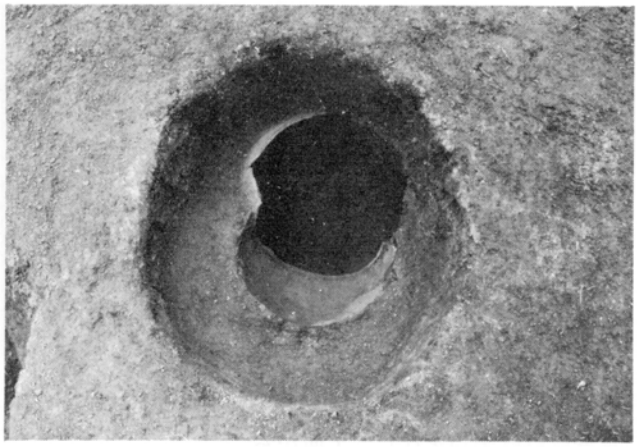


Fig. 6　　第２号甕棺墓

第２号甕棺墓

第１・３号甕棺墓と同じように西側に向かって墓坑が掘られている。墓坑上面形は65×55cmの楕円形で坑底までの深さは55cmを計る。第１号甕棺墓と同じように上棺は小型の甕、下棺は壺の組み合わせである。壺は頸部より上部を打ち欠いており胴部には凸帯はない。また目張りの粘土も見られなかった。

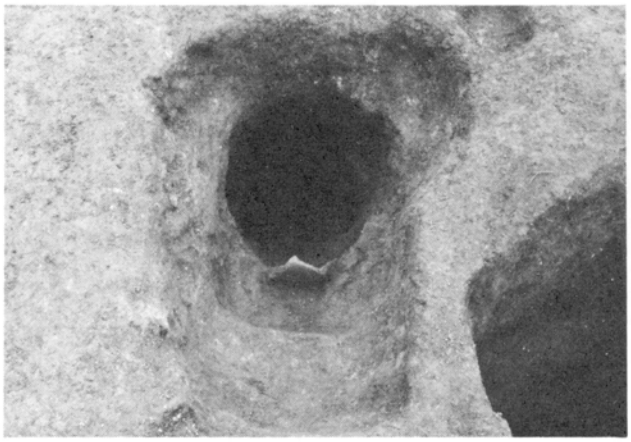
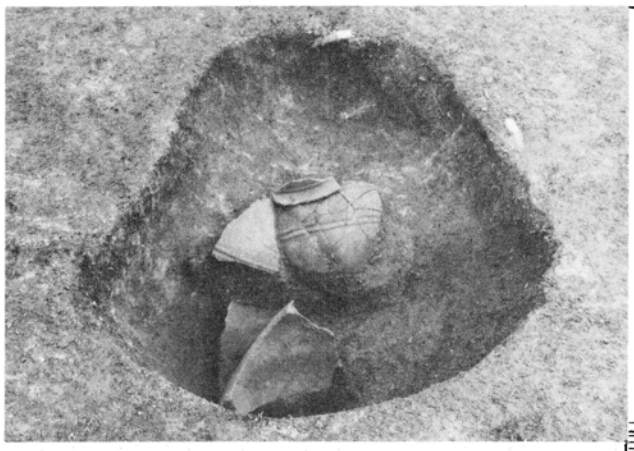


Fig. 7　　第５号甕棺墓

第５号甕棺墓

第５号土坑墓と第６号土坑墓の間に位置している。墓坑は2.2×1.5 m の不整長方形で西に向かって斜めに掘られている。上棺は甕を用いており、下棺は甕の複棺である。主軸はN－70°－Eで第１・２・３号甕棺墓と同じような主軸をなし、下棺を丘陵の高い方に向けるという共通点がある。小児用甕棺墓であろう。



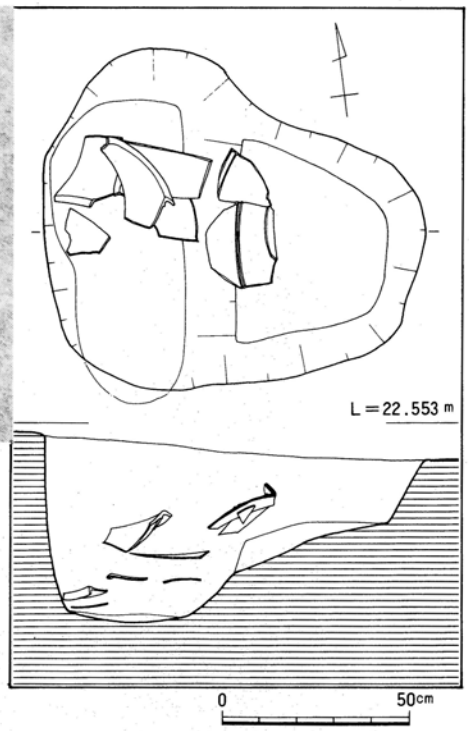


Fig. 8　第４号甕棺墓

第４号甕棺墓

第４号甕棺墓は第３号甕棺墓の東側約１ｍのところにある。墓坑上面は0.9×１ｍの不整円形で、東側での深さは50cmある。上部は削平が著しく、坑内に２個体分の破片が見られる。いずれも小型の甕である。一つはＬ字形の口縁部を持ち、口縁下に１条、胴部に２条の凸帯をめぐらしており、外面には丹塗りを施している。もう一つの甕は、同じようにＬ字形の口縁であるが、胴部に凸帯はなく、口縁下のみに１条めぐらしている。これらは後世の破壊によって破片となったか、あるいはある種の蓋的な役目として破片が上に置かれたのかいずれも判然としない。

第６号甕棺墓

第６号甕棺墓は第７号甕棺墓と並んで発見された。墓坑は第７号甕棺の墓坑を切っており、第６号甕棺墓が新しい時期に埋置されたことがわかる。墓坑は 1.5×1.1ｍの東西に長い楕円形で、東に向かって斜めに掘られている。埋土上部には小型甕の破片が見られた。単棺で口縁部には目張り用の粘土が認められた。

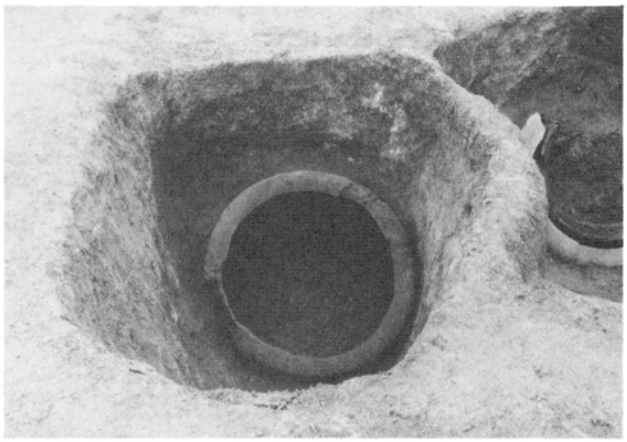


Fig. 9　第６号甕棺墓

Fig. 10　　第７号甕棺墓

第７号甕棺墓

第６号甕棺墓の南側に接して埋置されている。墓坑は第６号甕棺墓よりやや大きく、東に向かって階段状に傾斜をもって掘りこまれている。棺は大型の失蓋単棺で口縁部には目張り用の灰白色粘土が見られた。第７号甕棺墓と同じように口縁部はＴ字形断面をなす。

Fig. 11　　第８号甕棺墓

第８号甕棺墓

第９号甕棺墓の北側に接近して埋置されている。上面形は方形をなし墓坑は浅く、表土直下で発見された。下棺の壺に鉢をかぶせた複棺である。下棺の壺は、球形の胴部に外反する頸部がつき、口縁部上面はほぼ平坦となっている。胴部に凸帯は見られない。

Fig. 12　　第９号甕棺墓

第９号甕棺墓

墓坑は上面で1.3×1.5ｍの長方形でほぼ垂直に掘られ、さらに東に向かって棺を挿入する斜坑が掘られている。下棺は中型甕で、上棺は甕が用いられている。この二つの甕は接口ではなく、上棺を下棺に挿入する方法をとっている。人骨が残っており、その保存状態はよい。

第10号甕棺墓

第10号甕棺墓は発掘区の南端線に接して発見された。墓坑は0.7×1ｍの長方形で垂直に掘られ、下棺を埋置するためさらに東側に斜坑が掘られている。下棺はく字形断面の口縁部を持つ甕で口縁下に三角形凸帯を１条めぐらす。上棺は頸部上半を打ち欠いた壺を用いており、下棺に挿入している。

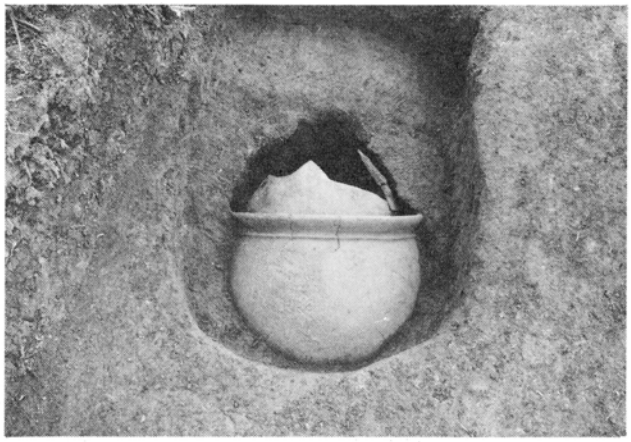


Fig. 13　第10号甕棺墓

第11号甕棺墓

第11号甕棺墓と第12号甕棺墓とは同じ墓坑内に埋置されているかのようであるが、墓坑周縁にある第12号甕棺墓が破壊されていないことから第11号甕棺墓が時期的に早いことになる。小型甕の複棺で上棺を挿入する方法をとっている。小児用甕棺墓である。

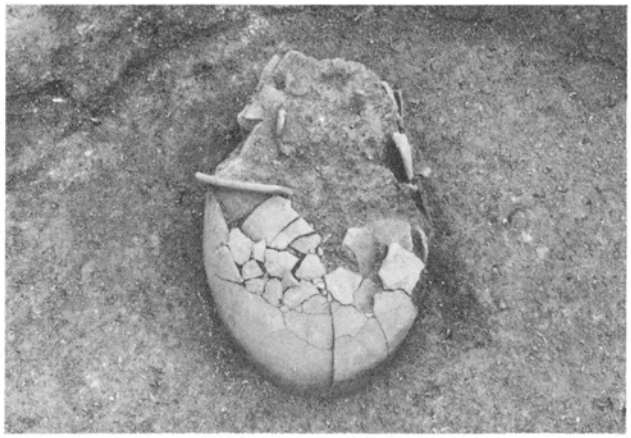


Fig. 14　第11号甕棺墓

第12号甕棺墓

第11号甕棺墓の墓坑を切っている。上部は削平され原形を知りえないが複棺であろう。下棺は胴部に丸みのある甕が用いられている。第12号甕棺墓と同じように小児用甕棺墓である。第11号甕棺墓の墓坑は小児用甕棺墓としては大きく、また第６・７号甕棺墓の墓坑と類似しており、下部にはもう１基甕棺墓が存在していると思われる。

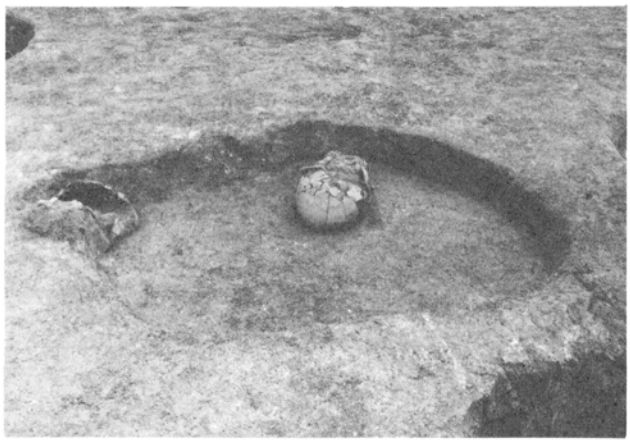


Fig. 15　第11・12号甕棺墓

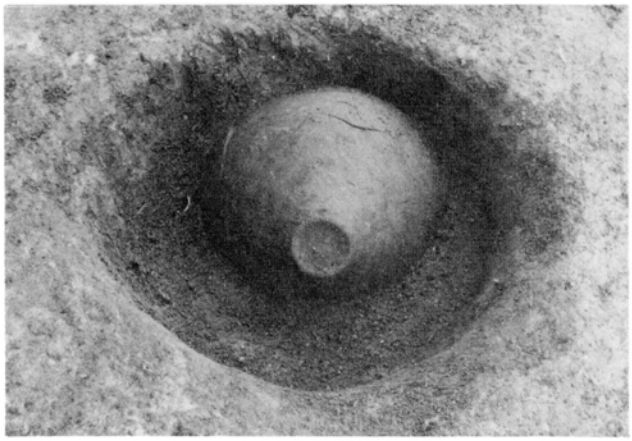


Fig. 16　第13号甕棺墓

第13号甕棺墓

第13号甕棺墓は、第12号甕棺墓と第14号甕棺墓の間にあり、発掘区では南端の小群に位置している。墓坑は径50cmの円形で、小型甕２個の接口式甕棺墓である。上棺の甕は、Ｌ字形の口縁部を持ち口縁下に１条、胴部に２条の凸帯をめぐらしている。

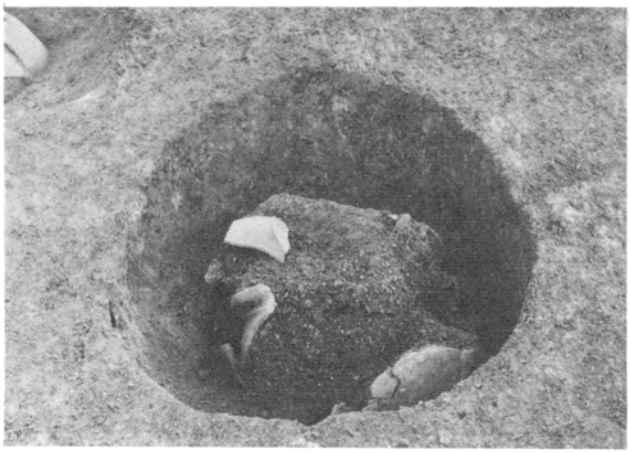


Fig. 17　第14号甕棺墓

第14号甕棺墓

第13号甕棺墓と同じように小児用甕棺墓である。墓坑は径70cmの不整円形を呈している。上棺は破片となっており全形を知りえないが甕であろう。下棺も甕が用いられている。甕は胴部に丸みを持っており、口縁部はく字形の断面をなし、口縁下に１条の凸帯がめぐっている。

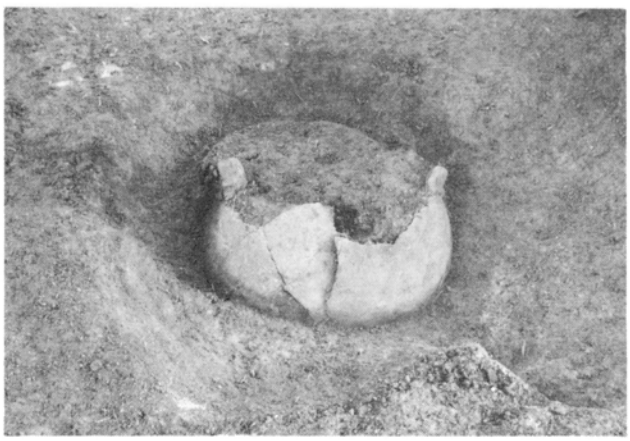


Fig. 18　第15号甕棺墓

第15号甕棺墓

第15号甕棺墓は第14号甕棺墓の南側に位置している。墓坑は70×80cmの楕円形である。下棺の甕のみが検出されたが、かなり削平されているため上棺が存在していたかは判然としない。甕は口縁部を南東側に向け、傾斜して埋置されている。口縁部の断面はく字形で、口縁直下に凸帯をめぐらしている。

第16号甕棺墓

第17号甕棺墓とともに発掘区の南端部に位置する。現在は下棺の壺だけであるが第１号甕棺墓と同じように頸部上半を打ち欠いているから複棺をなしていたのであろう。やや小さいが同じ形態をなす。

第17号甕棺墓

第16号甕棺墓の下部より発見された。第９号甕棺墓と同じような墓坑に大型の甕が斜めに埋置されている。

Fig. 19　第16号甕棺墓

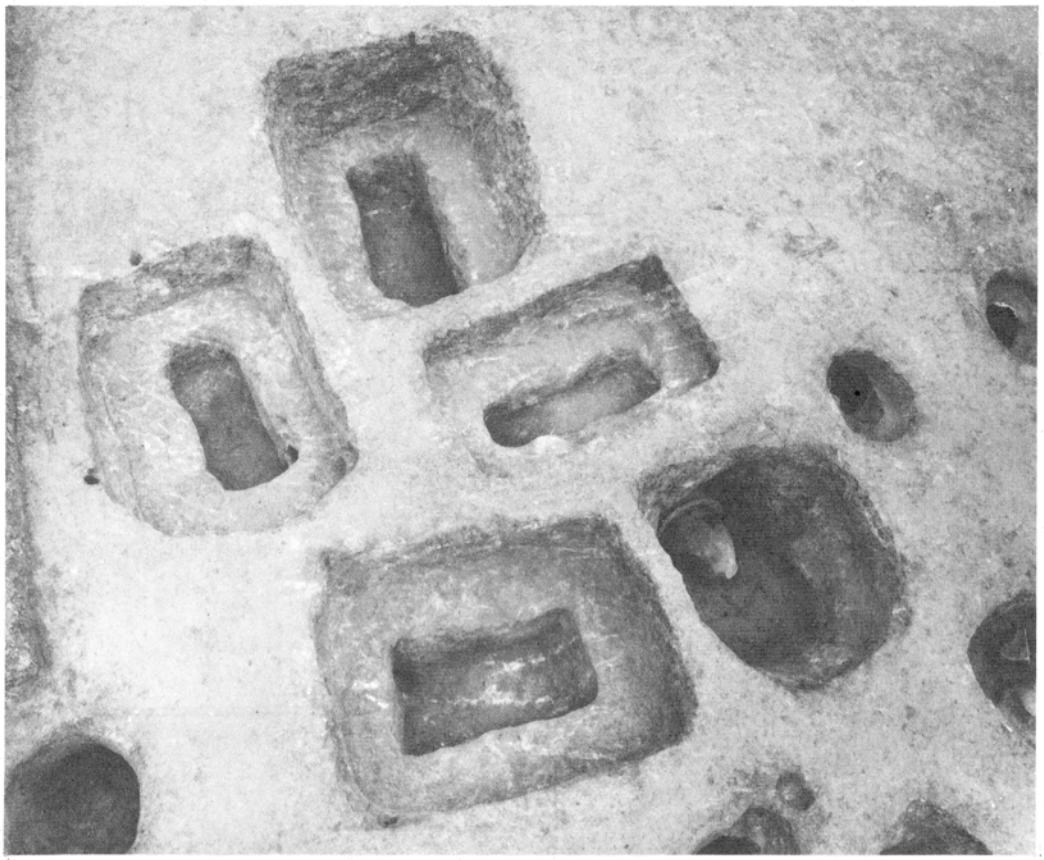
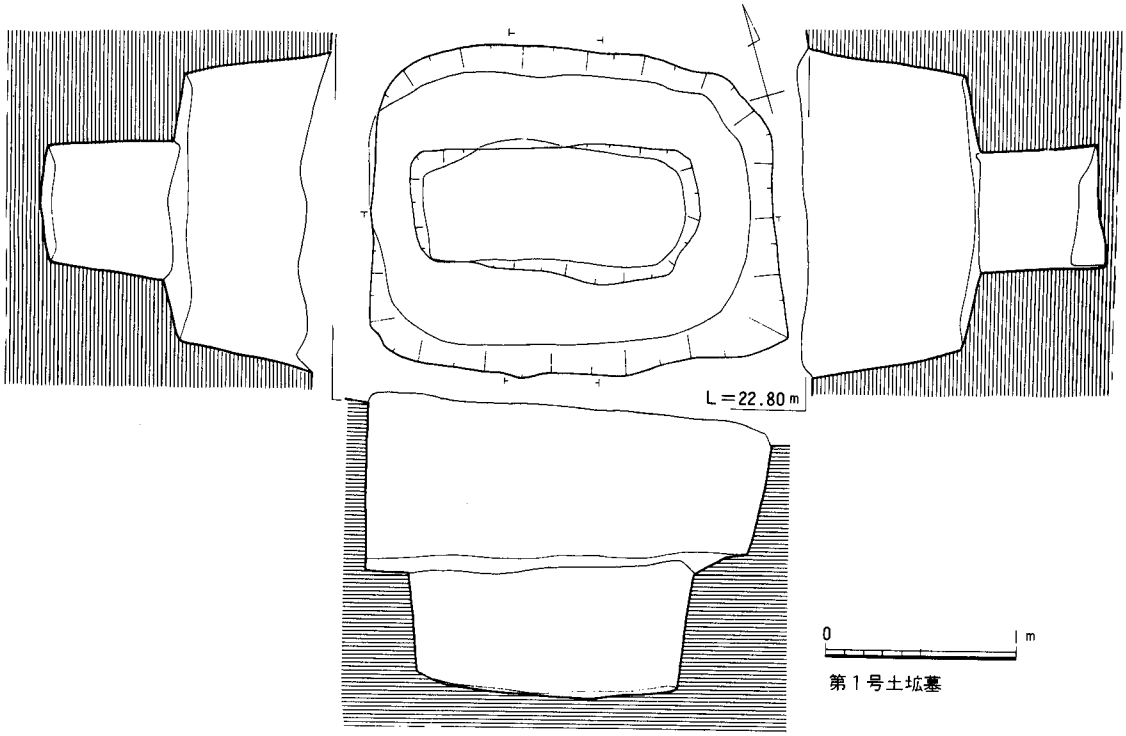


Fig. 20　土坑墓群



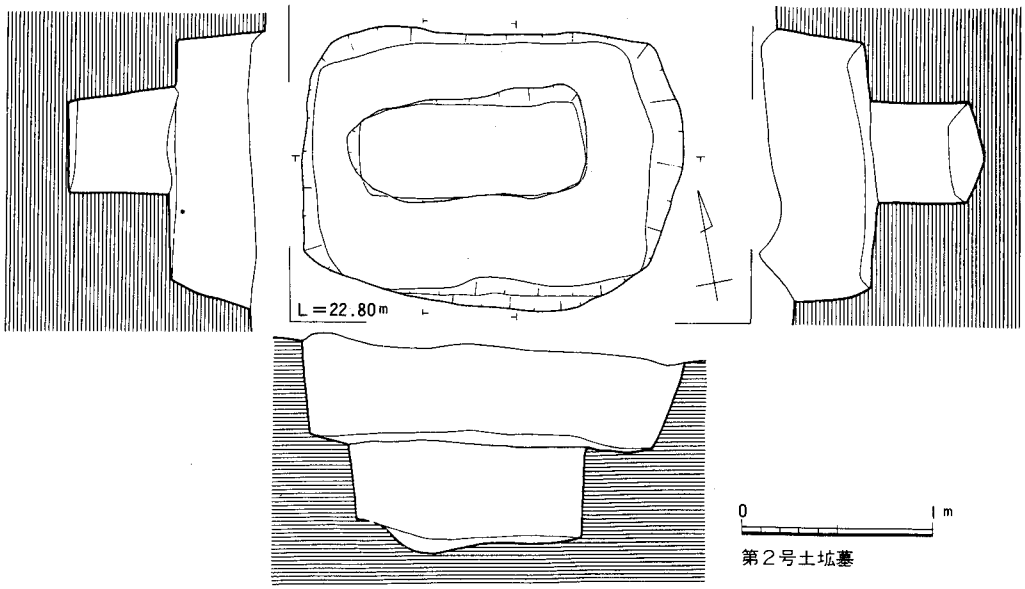


Fig.21　第１・２号土坑墓実測図（縮尺 1/40）

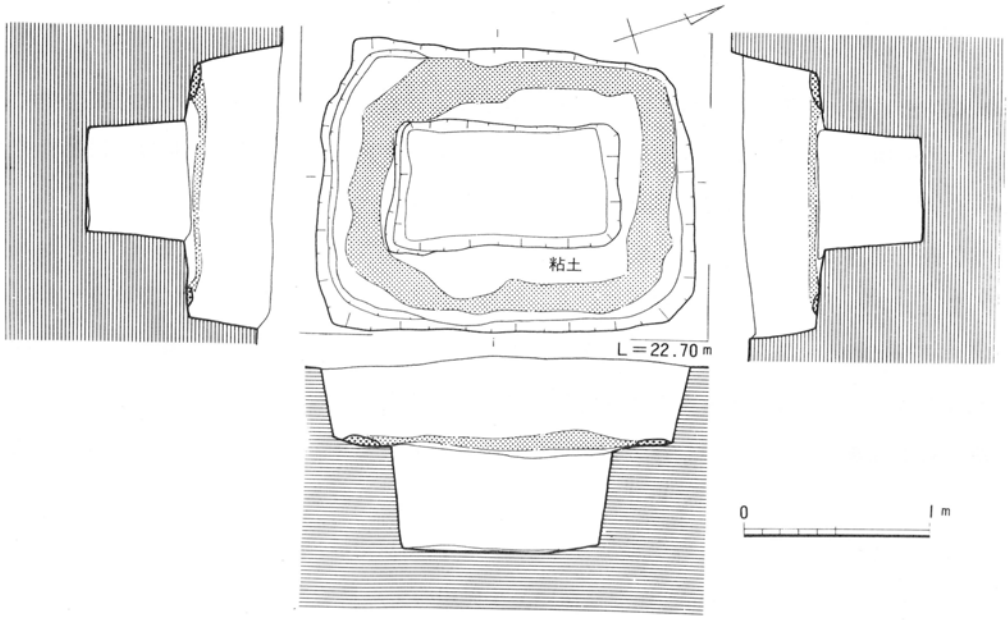


Fig. 22　第4号土坑墓実測図（縮尺 1/40）

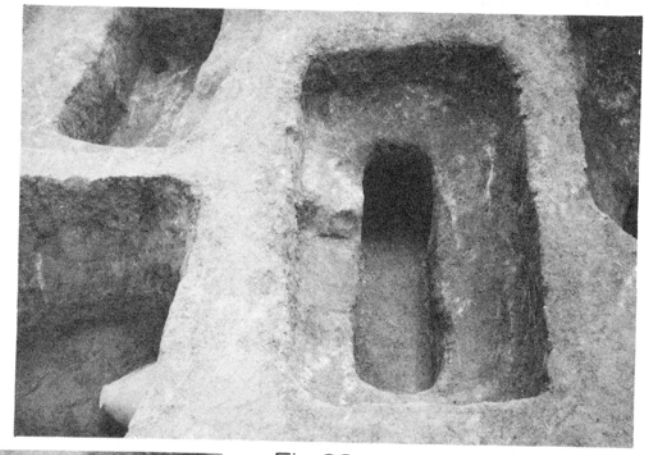
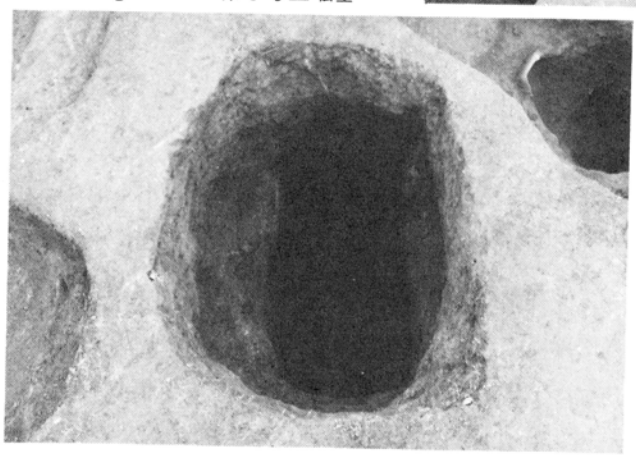


Fig. 23　第3号土坑墓

Fig. 24　第5号土坑墓



2．土　坑　墓

第１号土坑墓　第１号土坑墓は発掘区の西端部に位置している。７基ある土坑墓の中で東西方向の主軸をもつのは第１号土坑墓と第２号土坑墓の２基のみである。土坑は二段掘りで上端より90cmの深さから二段目の埋葬部を掘りこんでいる。

第２号土坑墓　同じように二段掘りの土坑墓である。二段目は上端より55cmの深さから掘りこまれているが、やや北側に寄っている。頭位は第１号土坑墓と同じように東向きであろう。

第３号土坑墓　第３号～７号土坑墓は南北方向の主軸である。二段目埋葬部の掘りこみは約25cmと浅い。坑底は平坦をなさず南側に向け傾斜して掘られている。

第４号土坑墓　もっとも整然とした形をなす土坑墓である。二段目の平坦部には灰白色の粘土が８cm程の厚さでめぐっており、蓋の目張り用と考えられる。

第５号土坑墓　二段掘りの土坑墓ではあるが、南側短辺はほぼ垂直な壁をなしている。上端より坑底までの深さは1.2mとかなり深い。小児用の土坑墓であろう。

第６号土坑墓　第５号甕棺の南側に位置する。素掘りの土坑墓で、上辺は長辺が1.6m、短辺が0.8mの長方形である。

第７号土坑墓　土取りの崖面より発見されたもので二段掘りの土坑墓である。他の土坑墓の一段目の深さが0.5～1.5mあるのに対し、５cmときわめて浅い。

土坑墓計測表　（単位　cm）

No.	方　位	平面形	長×幅・深さ	No.	方　位	平面形	長×幅・深さ
1	N－74°－W	隅丸長方形	220×170　150	5	N－17°－W	隅丸長方形	115×　85　125
2	N－80°－W	隅丸長方形	200×150　110	6	N－　9°－E	長　方　形	160×　80　　95
3	N－　9°－E	長　方　形	180×100　　75	7	N－10°－E	長　方　形	180×100　　75
4	N－19°－E	長　方　形	200×150　115				

第Ⅲ章　まとめ

本遺跡は、東から西へのびる長さ約300ｍの小丘陵上にあり、これまでの甕棺出土地点からみて、本来は丘陵上が墓域となっていたものと思われる。今回の発掘区はその一部にすぎず、さらに発掘途中にあり墓域の全容については本報告に記したい。甕棺・土坑墓の時期であるが、両者の切り合いはなく時期差があるかは明確にできない。甕棺墓の時期であるが、第３・６・７号甕棺は、口縁断面形がいわゆる須玖式のＴ字状口縁の内唇部が退化し、く字状の立岩式に近い形状をなしている。弥生時代中期後半のものが多いようである。

福岡市教育委員会
NO.1548
57.3.20
埋蔵文化財センター

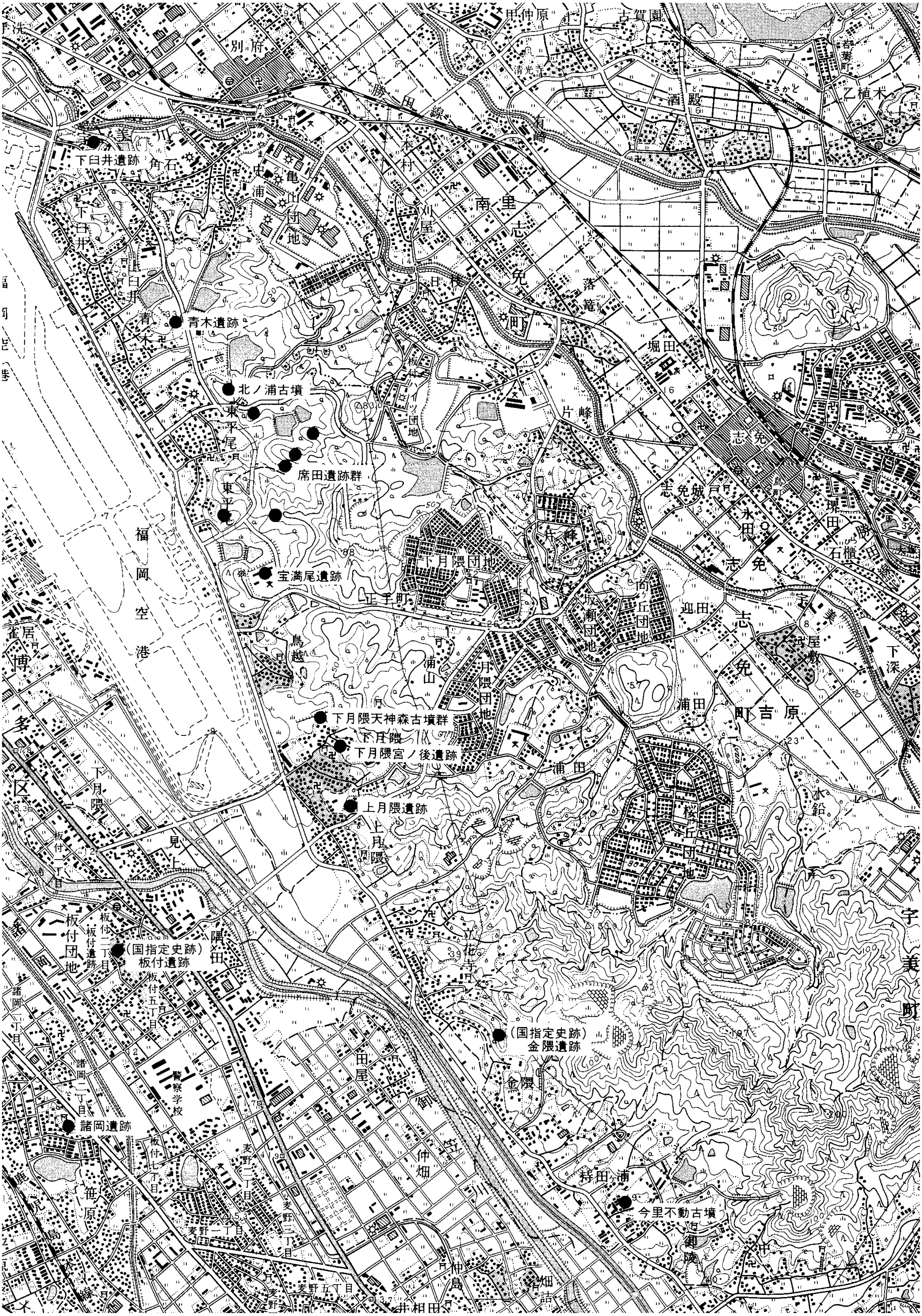
福岡市博多区
下月隈宮ノ後遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第61集
©1980年３月31日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目７－23
電話　（福岡）711－4667（文化課）
印刷　ダイヤモンド印刷株式会社

1548

遺跡の位置図


下臼井遺跡
青木遺跡
北ノ浦古墳
席田遺跡群
宝満尾遺跡
下月隈天神森古墳群
下月隈宮ノ後遺跡
上月隈遺跡
(国指定史跡)
板付遺跡
(国指定史跡)
金隈遺跡
諸岡遺跡
今里不動古墳
福岡空港
博多区
志免町
宇美町